

令和3年度 少年の塔慰霊祭

期日：令和3年9月25日（土）

「少年の塔慰霊祭」は、「上伊那各地より満蒙開拓青少年義勇軍として満州に渡り、再び祖国の地を踏むことのできなかつた青少年の御霊を慰霊し、永遠の平和を祈念する」趣旨で、公益社団法人上伊那教育会の平和教育研修事業として毎年行っています。

慰霊祭に先立ち、2回の整備作業にご参加いただいた先生方、ありがとうございました。

慰霊祭は、感染症対策として本年度も一般参加者の募集を取り止め、正副会長等の上伊那教育会役員20名が参加して執り行いました。



慰霊の言葉

原文章会長

太平洋戦争終結から、76年の歳月が過ぎました。王道楽土の理想に燃え、満蒙開拓青少年義勇軍として中国大陸に渡り、志半ばにして荒野に散った90余名の若い御霊に、謹んで哀悼の誠を捧げます。

「満州は日本の生命線」と言われ、昭和7年に満州国が誕生しました。計り知れない資源と広大で未開の原野を開拓して「王道楽土」を築き、国内の人口・経済問題を解決すると同時に、軍事的にも北の守りを固めようとする国策の一環として計画された満蒙開拓。貴殿達 義勇軍もその一翼を担わされたのでした。

国家総動員体制が強化されていく中、上伊那教育会も教師自身率先して大陸に渡り、また上伊那義勇軍父兄会を組織するなど、国策として積極的に取り組み、昭和12年から終戦までに郡下で約500名を越える義勇軍を送り出しました。そして、昭和20年8月9日 対日戦線布告したソ連軍が次々に大陸を南下、「王道楽土・五族協和」の夢は一瞬にして消え去り、関東軍の武装解除は極度の大混乱暗澹たる状況の中、貴殿達多くの義勇軍が若き命を落としていくこととなりました。

教えられるままに何の疑問も持たず純心に生き、そして若き命を異境の地に散らせた90余名の貴殿達。台上に立つ少年の像は胸を張り、遙か遠くの何を見据えているのでしょうか。今、日本や世界の状況に目をやれば、いのちの尊さや平和に対する危機感を抱かざるを得ない出来事も少なくありません。

しかし、私たちは、今ここに頭を垂れ、過ぎ去りし日々思いを寄せると同時に、戦後76年を過ぎてなお、この上伊那教育会の負の遺産を決して風化させることなく、真摯に学び、永久平和への努力を改めて誓います。二度と、同じ過ちは繰り返しません。

最後に、今月19日、貴殿達と共に義勇軍に参加された北原和夫様が貴殿達の元へ旅立たれました。北原様は、昭和21年に帰国後、心ならずも満州の地で命を落とされた貴殿達お仲間のことを心より悔やまれ、ここにある少年の塔建立や、二度にわたる日中友好教育視察団の派遣等、満蒙開拓青少年義勇軍として散っていった魂を慰める事業にご尽力された方でした。

北原和夫様、そして90余名の若き御霊よ、共に満州で苦労されたお仲間同士、どうぞ心ゆくまで語り合い、そして、安らかにお休みください。

令和3年9月25日

公益社団法人上伊那教育会

会長 原文章

上伊那郷土研究室専門幹事の塚田博之先生よりお話をいただきました。〈以下、要旨〉

日清日露戦争以降、本格的に中国東北地方（いわゆる「満洲」）へ進出した日本は、1931年（昭和6）の満州事変の後、日本の操り人形のような国「満州国」をつくり、農業移民を本格的に進めました。世界恐慌によって苦しい生活を送っていた農村からは多くの農民が開拓民として大陸に渡り、1937年（昭和12）に満洲への農業移民は国策となりました。大陸での戦線の拡大や景気の回復により農業移民が不足してくると、小学校高等科を卒業する子どもたちに満州行きを働きかけるようになりました。それが「満蒙開拓青少年義勇軍」です。今の中学2年生にあたります。県から市町村ごと、そして各学校ごとに送り出す人数が割り当てられ、各学校では校長から教師たちに働きかけ、教師たちは教室の子どもたちに満州行きをすすめました。そのようなことは日本中で行われたわけですが、長野県は日本で一番多くの2万7千人の満州移民を、そして日本で一番多くの7千人もの子どもたちを満蒙開拓青少年義勇軍として送り出しました。



塚田博之先生

1945年（昭和20）8月9日、ソ連の侵攻が始まりました。頼みにしていた関東軍はすでに南下していてその姿はなく、同年春からの「根こそぎ動員」によって若い男性もおらず、高齢者と女性、そして幼い子どもたちばかりの開拓団はソ連軍の砲火と現地人の襲撃を受けました。運良く生き残った人々も、酷寒の収容所で亡くなる人が多くいました。軍隊に入隊していた人々はシベリヤに送られ、過酷な抑留生活を強いられました。生き延びた人々は、やっとの思いで引き揚げ船で日本に帰還します。

戦後、引揚者への支援が行われましたが、上伊那教育会としても、義勇軍引き揚げ者への支援を進めます。そして、昭和33年ころから、上伊那から義勇軍として満州に渡り、遂に帰ってくる事ができなかった方々の霊を慰め、永遠の平和を祈るための記念像をつくろうという運動が起こります。教職員や子どもたち、地域の方々からは多額の寄付が集まり、1961年（昭和36）4月19日、伊那公園に建てられたのがこの「少年の塔」です。

2011（平成23）年8月号の『市報いな』に、北原和夫さんのインタビュー記事が掲載されています。北原さんを偲び、北原さんから体験をお聞きするつもりで読みたいと思います。

昭和18年3月、伊那国民学校高等科（現在の伊那中学校）を卒業した私は16歳でした。戦争が激しさを増す中、当時の国策で学校でも奨励していた「満蒙開拓青少年義勇軍の第6次隊」に志願しました。第6次隊は上伊那から約80人、諏訪、下伊那も合わせると250人が志願しました。茨城県内原訓練所へ入所し、5か月の訓練の後、9月上旬に満洲へ渡りました。

満州国北安省慶安県鉄驪訓練所で、2000人の仲間と共に明けでも暮れても厳しい訓練と農事作業を行いました。厳しい訓練の日々は続き、昭和20年8月の終戦の日を迎えました。

終戦により武装解除された満州では、ソ連軍が押し寄せてきて、満州はソ連軍の配下に置かれました。訓練所で軍隊に入隊していた仲間はシベリヤへ連行され、飢えと寒さの中での重労働で、病魔に侵されて亡くなった人もありました。私たちは、昭和20年8月下旬、訓練所付近の鉄山包駅に集結させられ、貨車へ詰め込まれて南下し、奉天で下車を命ぜられました。これが大変な、そして非常に惨めな生活の始まりでした。食事はコーリャンと粟のおかゆ一杯（半合）を二人で分ける生活でした。食べるものがなく、栄養失調と寒さで亡くなる人もいました。そんな中、発疹チフスに罹り、高熱に侵されました。体はだんだん衰え、頭髮はすっかり薄くなり、骨ばかりの骸骨同様でした。同じく発疹チフスによる高熱に侵され窓から飛び降りて死亡する人もあり、まさに生き地獄でありました。

9か月に及ぶ奉天での生死をさまよう暮らしの後、昭和21年5月28日、ようやく奉天を出発でき、京都府舞鶴港に到着、6月19日に、なんとか伊那の土を踏むことができました。山と麦畑のコントラストがなんと綺麗だったことでしょうか。「日本の国は美しい。帰ってこれた。」とみんなで涙したのを覚えています。戦時、戦後、食糧難で大変な思いをしたことを思い返すと、物や食べ物を粗末にしてはいけないと強く思います。

今年は終戦から66年目、この間、地球上のどこかで戦争があり、戦争が絶えたことがありません。日本は平和を唱える第一人者でなければならぬと思います。北原さんの体験は以上です。

広島や長崎の方々は原爆の経験を通して平和の尊さを学び、語り伝えています。

沖縄は沖縄戦を通して、東京は東京大空襲を通して語り伝えています。

日本で一番多くの満州移民と満蒙開拓青少年義勇軍を送った私達長野県民は、満州移民を通して戦争の悲惨さと平和の尊さを語り伝えたいと思います。下伊那郡阿智村に満蒙開拓平和記念館ができたことは重要なメッセージです。

上伊那で暮らす私たちは先ほどの北原和夫さんの思い、日本は平和を唱える第一人者でなければならないという思いを受け止め、今日のこの「少年の塔慰霊祭」をこれからも続けていきたいと思います。あわせて、満蒙開拓青少年義勇軍として600名近い子どもたちが大陸に渡り、その約四分の一は故郷に帰ることはできなかったことをはじめ、歴史的な事実をしっかりと後世に伝えていきたいと思います。

